流行学

「文化」にも法則がある

宮本悦也著

ダイヤモンド社

流行学 ― 文化にも法則がある ― 宮本悦也著 ― ダイヤモンド社

著者略歴

宮本悦也（みやもとえつや）

1931年東京生れ。1970年早稲田大学大学院芸術科卒業。1960年～1969年松下電器（松下通信工業出向）勤務後，1969年東京アンドパリ社（服飾流行予測ビジネス）の代表となり，現在にいたる。
著書――『70年代のファッションを予測する』（繊維マーケティングセンター），『松下電器』『パニック学入門』（東京アンドパリ社），『商品の流行学』『情報の流行学』（ダイヤモンド社）『必ず成功するブチック経営の極意』（ビジネス社）など。
住所――横浜市鶴見区寺谷1-18-18

流行学――文化にも法則がある――

昭和47年4月20日　初版発行
昭和53年3月20日　10版発行

著者　宮本悦也

©1972 Etsuya Miyamoto

発行所　ダイヤモンド社
郵便番号　100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集　電話 東京 (504)6403
販売　電話 東京 (504)6517
振替口座 東京 9-25976

編集担当／山下　磨
松濤印刷・中西製本
落丁・乱丁本はお取替えいたします
0036-185251-4405

はしがき

この本は、流行の構造とその諸法則について書かれた、地球上で最初の本である。

私が、流行の現象と本質の乖離と一致という、独自のエネルギーを発見したのは一九六七年のことだ。

それ以前の私は、「流行は、その社会的・政治的・経済的条件の反映である」という周知の立場に立っていた。すなわち一九六〇年以前には、「流行はその社会的環境の反映である」という流行必然論の立場に立っていた。そして一九六〇年以後は、社会的環境の流行に与える加速減速エネルギーと、流行独自のエネルギーを区別しないまま、構造主義的立場に移行していた。

また一九四六年以前の私は、「偶然の積(セキ)は必然なり」という流行偶然論の立場に立っていた。流行は、その〈見える構造〉(＝現象)の側では、一人の人間と流行の出会いは偶然以外のなにものでもない。だが、その〈見えない構造〉(＝本質)の側では、必然的な自己貫徹エネルギー

を所有している。このことを、私は一九六七年以前には解明していなかった。

私に最後の飛躍（ジャンプ）を許した学問は、統計学であり、その〈見かけの関係〉理論だった。そこで第1章は、流行と社会的環境とのあいだの〈見かけの関係〉思考の批判からスタートさせている。

したがって、私の著書をはじめて読まれる方は、第1章から順序よく読んでいただけば、流行を確実に予測するノウハウを手にすることができる。しかし、予測精度をアップするためには、読者が関係する分野、その領域の特殊な法則を発見する必要がある。この本は、その特殊な法則を発見する手がかりになるだろう。

この本に書かれた流行予測のノウハウは、私の約九年半の松下電器の社員生活と、約三年半の東京アンドパリ社（私の主宰する服飾の流行予測会社）のビジネスで、その正確な的中度を検証ずみである。

その成果は、『松下電器』（三一書房刊）、『70年代のファッションを予測する』（繊維マーケティング・センター刊）に書いたので、この本では事例をできるだけ、服飾と弱電業界以外に求めた。

この本は当然、文化現象のあらゆる領域での〈見かけの関係〉の思考体系の変革を要求している。前述の『松下電器』では心理学の変革を要求し、『パニック学入門』（時事通信社刊）では経済学の変革を要求した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

この本は、前述二編の完結版として、私の構造心理学のノウハウを公開することに重点をおいている。したがって、すでに私の著作をお読みになった方は、第7章の「流行の安定構造と法則＝その3」から読まれるほうが、ダイナミックな興味をそそられるだろう。

この流行学が予言している一九七〇年代の日本の姿は、悲劇的な長期不況構造と、文化現象のあらゆる分野における輝かしい世界的レベルの獲得である。

この本が、この劇的な変化を先取りし、恐慌（パニック）の嵐を乗り切り、文化現象における革命の勝利のための最大の武器となることを期待してやまない。

一九七二年二月二日

宮本悦也

一九七七年の第九版発行にあたり、第11章を追加し、装幀を変更した。

目次

はしがき

第1章　〈見かけの関係〉の法則　1

☆流行と慣習を区分しているモノサシ
☆安部公房と加藤周一の自己欺瞞
☆戦後新転向のスタート
☆古い流行観の破産
☆第三の要因を発見せよ！
☆時流や世論という名のパワー
☆犯罪と遺伝とのあいだの〈見かけの関係〉
☆生きることの意味の喪失
☆第1章のまとめ

第2章　見える構造・見えない構造　19
☆汚ないはカッコよい
☆現代のマクベス夫人＝文明評論家
☆言葉を交通整理しておこう
☆〈見えない構造〉はなぜ見えぬ
☆やがて死ぬ気色もみえず蟬の声
第3章　ファドの法則　33
☆ハレンチ・トッピ・コッケイ・不快さ
☆ファドと流行を区分する法
☆同一の言葉と異なる概念の落し穴
☆流行とは孫悟空のことである
☆流行拒絶人間の弱さ
☆第3章のまとめ

第4章　クレイズの法則　45
☆玩具のクレイズ＝単独型
☆消滅点の見えないクレイズ＝連続型
☆柳の木の下の複数のドジョウ＝下降抛物線の法則
☆小柳ルミ子の運命座標
☆流行とは連続型クレイズのことだ
☆既成学問は文化反革命的である
☆流行歌とその他についての注意がき
第5章　流行の安定構造と法則＝その1　63
☆スマイル（平和・美（カツコヨサ）・笑顔）をわれらに！
☆利便性は流行の後天的性格である
☆アバタもエクボの法則
☆カルダンと森英恵の時差（ギャップ）
☆伝統の安定構造の不安定性
☆文化現象の相対的安定性の法則

第6章　流行の安定構造と法則＝その2　77
☆キンにみる長期安定性
☆七〇年代の世界的パニックの不可避性
☆マルクスの最大の功績と誤謬
☆自然現象と文化現象の相違性
☆仮説の検証を服飾産業に選んだのは
第7章　流行の安定構造と法則＝その3　89
☆常に安定性を求める内的心理構造
☆植物的感覚（フィーリング）人間の登場
☆無用者（アウトロー）となるかユダとなるか？
☆〈見えない構造〉の自己貫徹エネルギー
☆一億総ザンゲ式雪崩現象
☆ノーカー運動反対論者のパラドックス
☆第5章から第7章までのまとめ
☆フォード（牛の顔）の法則

第8章　文化現象四〇年サイクル説　107
☆四〇才はキザ、七〇才はイキ
☆孔子も時をえずば世に出ず
☆六〇年代の流行イニシアチブの移動
☆現象の類似性は偶然である
☆四〇年サイクルの日本的特殊性
☆湾脚美からの日本女性の解放
☆日本の文化現象の世界的優位性
☆モノばなれ革命の発祥地
☆〈見かけの関係〉の三つの法則
第8章のまとめ
第9章　ミヤキンソンの法則　131
☆新製品を確実にヒットさせるノウハウ
☆虫歯の防衛から撃滅へ＝事例研究

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

☆クローズ・アップの劇的登場（クローズ・アップ）
☆マクリーンズの影響力
☆新製品を成功させる三つの法則
☆企業の栄枯盛衰は避けられない
☆歯ミガキは文明人の嗜好品
☆真の独創はその模倣を排除する
☆二番手商法と逆バリ商法
☆商品開発の多数決原理の法則
☆新製品発売のタイミングと決断

第10章　反論したい人のためのノート＝あとがきにかえて　149

☆流行セックス論は男性支配の象徴
☆フランス構造主義によるフロイト復活
☆構造心理学と行動心理学の相違
☆構造心理学とは何か？
☆精神的真空は急進主義者（ラジカリスト）の特権である（ニヒリズム）

☆義理人情の復権要求
☆流行の予測と創造の背律
☆デルフォイ神のお告げ

第11章　技術革新と流行

☆人間が存在しないと成立しない学問
☆厳密な科学性とは何か？
☆どちらが独断か？
☆この本をわかりやすく読む法
☆なぜホンネとタテマエは一致しないのか？
☆文化現象の固有の周期律とは？
☆経済学はアト理屈にすぎない！
☆商品のない文化現象と商品のある文化現象
☆商品としての流行歌手
☆エジソン以前と以後の流行歌
☆労働の商品化と非商品化

☆技術革新と商品化＝その1
☆技術革新と商品化＝その2
☆技術革新と商品化＝その3
☆自然科学史家のアト理屈
☆資本主義経済の永遠の拡大エネルギー？
☆耐久消費財の技術植民地社会主義国家

〔写真提供〕月刊チャネラー・繊研新聞・他

第1章 〈見かけの関係〉の法則

1970年ノーブラの大流行で下着業者は大あわて。そこで登場したのがこのシースルー・ブラレス・ブラ。もちろんファドにもならなかった。宿敵ノーブラが大流行したのは，下着業者の肌色化作戦が成功した結果なのだから皮肉……。

☆流行と慣習を区分しているモノサシ

この地球上で、人間の存在と関係のある現象で、発生と消滅の有為変転（サイクル）をもたないものはない。だが、人間は、その発生と消滅のサイクルを、自分の一生（＝生命の発生と消滅のサイクル）というモノサシで測る。そして、人間の一生よりも短く、そして知覚できる現象を〝流行〟とよび、人間の一生より長く、そしてその変化を知覚しがたいために固定をしているかのように見える現象を〝慣習〟とよんで区別する。

さらに慣習を流行現象と対置させるときは〝社会的環境〟とよび、ある特定の流行現象を観察する場合には、その他の流行現象や慣習をまとめて〝社会的環境〟とよぶ。そしてこのアイマイな社会的環境こそ、その流行現象の発生装置だと考えて疑わなかった。

このように、流行はいまだかつて、人間が知覚できる現象としてしか観察されたことがない。そこで、流行は、社会的環境とよばれる、きわめてボンヤリした土壌の上に咲くアダ花であり、それ自身の構造や法則（＝本質）をもつものと考えられたことはなかった。

だが、ほとんどの人間が、その発生と消滅のサイクルを知覚できる服飾の流行の場合でさえ、そのサイクルの長さは一定ではない。

たとえば、変化そのものを「軽薄さ」や「企業に対する忠誠心の欠如」の概念と結合させやすい男性の服飾は、「変化こそ最高」とみなす女性の服飾にくらべると、その発生と消滅の長さは

どうしても長くなる。

また、冠婚葬祭の服飾の場合には、「礼節」という概念と固く結合するために、その変化のサイクルは非常に遅くなり、知覚しがたい。そこで、男女の区別なく、冠婚葬祭の服飾ルールは固定化しているように見える。

このように、**流行現象の変化のサイクルは、その現象が、どんな種類の概念と結合するかによって、その長短を決定する。**

それなのに流行は、人間に知覚できる現象の変化のスピードで〝流行〟〝慣習〟、そして、〝伝統〟に区分される。おまけに、変化のスピードの遅い現象はスピードの速い現象の発生装置だ、とするナンセンスな思考体系によって、人間は支配されてきた。

☆安部公房と加藤周一の自己欺瞞

流行は人間が知覚できる現象であると考え、それは知覚しがたいため固定化しているように見える現象から生まれるという思考体系は、必然的に、両者のあいだの現象の類似性・共通性の発見に、多くのエネルギーを消費する。

安部公房のエッセー『内なる辺境』は、世界と日本の若者のあいだで流行したミリタリー・ル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.